



# 瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 32 主日 B 年 (2024 年 11 月 10 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：列王記上 17 章 10 — 16 節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 9 章 24 — 28 節

福音朗読：マルコによる福音書 12 章 38 — 44 節

## 【三つの朗読から】

第一朗読に登場する預言者エリヤは、オムリ王朝のアハブ王とアハズ王の時代に活動した人です。オムリ王朝は対外的には諸外国との同盟政策を、対内的にはもともといたカナン人との宥和政策を採用しました。その結果、政治は安定したものの、異教のバアル神を礼拝する習慣が生じてきました。特にアハブ王は、シドン人の王エトバアルの娘イゼベルを妻としたため、公にバアル神への礼拝がなされ、イスラエルの伝統的な宗教、価値観は空洞化していきました。そんな北王国へエリヤは乗り込みます。

政治的安定と経済発展を主眼としたアハブ王にとって、異教のバアル神の礼拝は新たなイスラエルの宗教形態でした。しかし、エリヤは本来の信仰からの逸脱だと非難します。今日の朗読箇所は、エリヤが数年におよぶ干ばつを預言したあとの出来事です。

第一朗読にある「わたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい」(13 節) は、印象的なひと言です。やもめが提供できるのは、ごくわずかな小さなパン。しかし、それはエリヤを通じて語られた神の言葉への応答となります。

第二朗読にある小さな言葉、「ただ一度」(26 節) に注目してみましょう。キリストの贖いのわざは、ただ一度のこと。その「ただ一度」で、すべての人を救うのです。

その前にある 24 節の「まことのものの写し」は、直前にある「天にあるものの写し」と同じで、かつて大祭司はただの写し(フランシスコ会訳は「模型」)にすぎない地上の聖所で、神の

げんぞん しょうちょう  
 現存の象徴である香の煙の前に立ったが、キリストは本物の「天」に入られて、「今や」、キリストは罪の犠牲として現実に「神の御前に現れてくださった」のです。旧約の大祭司たちは地上の聖所までしか入れませんでした。新約の大祭司であるキリストは、天の聖所、神の御許まで到達することができるのです。

ここでの「神の御前」はプロソーポンですが、元来は「顔」という意味です。ですので、「神の御前に」を直訳すると「神の顔に」となります。神とキリストが顔と顔を相まみえる様子は、救いを表します。

福音朗読にあるやもめの様子を描写するイエスさまの言葉「だれよりもたくさん入れた」（43節）は、イエスさまの観察眼の鋭さを示します。明日をも知れぬ困窮の生活の中で、やもめは自分のもっているものすべてを惜しみなく与えたのです。

福音朗読にある「やもめ」に注目してください（40節）。「やもめ」とは寡婦のことです。律法には「やもめ、孤児、他国からの寄留者」を守れとあります（出20章20—23節、申14章28—29節、24章17—22節）。しかし律法学者たちは、弱い立場のやもめから何らかの形で搾取していたのでしょう。そして、人々から尊敬を得るために「見せかけの長い祈り」をしていたのでしょう。神の意志をよく知っている宗教指導者である律法学者たちがおこなう偽善は、神から「人一倍厳しい裁きを受ける」ことになるのです。

そして、「やもめ」の投げたお金が「生活費」だったことにも注目しましょう（44節）。「生活費」と訳されたこの言葉は、ギリシア語でディオスです。「地上での生活を維持するための財貨」の意味と「この地上での生活」（生涯）も意味します。やもめは自分のいのちを差し出したのです。

## 【ちょっとひと言】

第一朗読では、エリヤを通して語られる神の言葉に信頼したやもめの姿に焦点が当たります。福音では、今度は神の言葉（律法）を知らながらも偽善を働く律法学者たちが非難された後で、持っているわずかなものをすべて献げるやもめの姿が印象的です。後がない、一回きり献げるやもめの姿は、第二朗読の大祭司キリストと結びつきます。第一、第三朗読に登場するやもめ、そして大祭司キリストに共通なのは、神への信頼であり、献げるという自分を明け渡す行為なのです。